

## 論文要旨

題 目； 平安朝物語の本文研究－狭衣物語を中心に－

著者； 長谷川 佳男

娯楽が古典として位置づけられ学問対象となる時、本文分析は重要課題だ。その際に現代的要請に過度に応じると、古典作品は学問対象から利用対象に交替しかねない。古典文学は各々の独自性によって歴史を超えた構造体となっているので、分析方法は作品本性への適合を図らなければならない。証言の多くが長い歴史の中で喪失した現状で、学問・科学が成立しうるか、平安時代成立の代表的古典を具体的対象とし、ささやかな議論を試みた。本論は4章構成である。

## 第一章『狭衣物語』の本文批評

### 第一節 卷一、各群について

他の多くの古典文学作品の写本は室町時代末期または近世初期書写にまで遡るのが限界で、さらに本文の間で異読が少ないのに対し、『狭衣物語』は鎌倉時代に写されたと推定される複数の写本が残存していて、その間に、質の点でも量の点でも古典文学作品中で抜きんできた異読をもつ点に特色がある。本文がどのように伝わり、異読がどのように発生したのか。そのメカニズムの解明が学界の難題であって、その分析方法さえも不透明であった。本論ではまず今日までの研究史概観、問題の所在の明確化、ついで伝本リスト掲載、当面の課題を卷一に絞る。旧説を再整理して本文を3群に分ち、各群間の比較議論に必要な作業仮説を各群間の本文分析によって立てる。

### 第二節 卷一、第一群、下位グループの内部構造

ここで、その仮説を立てる上で、所属する伝本の数が最も多く、同じタイプの中で複雑に対立する異読の整理で、最も困難な第一群について、統計学的分析による低部批判を実施する。そのような第一群は、更にその下位のレベルで幾つかにグルーピングができる。そして、おのおの下位グループの内部で所属する本文同士を比較し、その近疎関係を多変量解析によって計測して、各下位グループの特質をおのおの記述する。その際に指標としたのは、以下の3つのファクターである。

- (1) 形式的な観点による本文の対立の仕方
- (2) 本文の規模
- (3) 意味の通じやすさ
- (4) 異読の散らばり

その結果として、第一群に属する各下位グループの内部の特質が抽出されて、下位グループ同士を比較するための作業仮説本文の最良の選択方法が導かれ、中田剛直説を援用しつつ、異群間の比較に堪える第一群の作業仮説本文を設定する上での科学的根拠を与えた。

### 第三節 卷一、第一群と第三群の関係 ―構造的本文批評の試み―

更にこの作品についての代表的な本文批評の旧説、すなわち三谷説と落合説を紹介した上で、新たにフランスの新約聖書の学者クエンタンの「三者の比較」を援用して、第二群（深川本等）を最古とする三谷説が成立しえないことを論理的に証明する。更に第一群と第三群本文を比較分析、その間に広域展開する構造的本文対立の存在を突き止め、時間軸で組織的に制御されるプロットレベルの対立に及ぶことを析出。2群間で本文の共通と著しい対立の中で、ある共通本文が、構造的対立の、一方で極めて技巧的に且つ有機的に機能し、他方で全く機能しない事実に着目し、第三群が第一群の改作であることを立証した。

#### 付節 第三節に対する御批判へのささやかな回答

またこれに対する批判に答える形で、第一群と第三群の構造的本文対立の中に第二群の異読成立のプロセスを解明し、第三節の三谷説批判を実例によって具体化した。

### 第四節 引用本文と異本を生む想像力

現今の引用論に客観的根拠として必要な他の文献資料に対する軽視が存在する、という認識に基づき、『狭衣物語』の本文批評に、引用資料そのものの持つ異読のバリエーションを視野に入れたとき、重大な問題点として、引用本文が新たな異読、異本を生む力、そのダイナミズムの中で生じる問題、そして引用論のもつ陥穽につき、具体的事例によって、警鐘を鳴らす。

### 第五節 或る異本の様態 ―九州大学付属図書館蔵細川文庫本『狭衣物語』―

章の結びに九州大学付属図書館蔵細川文庫本（細川本）の詳細報告。該本に「異本」の名に相応しい高い価値・意義を発掘した。第三節に対する反論の一つである森下純昭説を批判し、殆ど看過されていた該本本文の学問的価値を大きく転換、全巻にわたる批評を試みた。判読と書誌調査による、極め・装丁過程・補修過程の判定から、錯簡が第五帖と第六帖の冊を超えた括り単位で起こったことを証明、補修の入念さから錯簡発生を補修期以降と推定。そして読解上仮名文字の読み方に広い冗長性を認めるべき旨を主張。

卷一では、和歌本文を抜き出す森下説を批判し、客観的・トータルな分析を追求。結果、該本卷一前半は第一群の三条西本を初めとする下位グループにシフト、後半は何れの群にも属さない筋立ての対立に及ぶ独自性を発見。論証過程で共通本文の分析に関する統計的手法を創案。

卷二では、僅かな伝本ながら異本生成の主契機と推定される最古層の改作を今に伝えると第三節で論じた第三群に、該本を新たに分類所属させるべき旨主張。かつて卷二の第三群は鎌倉室町時代書写の古写本の部分を繋いで再建される極めて貧弱不安定な状態にあったが、該本は比較的新しい書写年代ながら、広域・安定的に第三群の本文を伝え、今後の本文研究に不可欠と評した。

卷三では、該本の独自性を解析析出した上で、三谷・中田説の本文分類の疑点を摘発して、本文批評における3群分類の抜本的見直を主張した。

卷四では、該本のあり様は他巻に比べ特徴的ではないと説いた。

## 第二章 『源氏物語』の本文批評

### 第一節 源氏物語本文考

他の平安時代の物語作品も見渡しつつ、『源氏物語』と『狭衣物語』を本文のあり様で比較。異同微少な反面、成立過程が原因の巻序浮動状態が平安末期の『源氏物語』の読み手にとり極めて深刻な本文問題であったと捉える。旧来、他巻に対する官位記述等内容上の齟齬疑問視される竹河巻の位置づけを真正面から扱って、そこから現代と異なる巻序が平安末に存在したとする仮説を導き出し、それが当時十分な意味を持ったことを立論した。

別本であり且つ随一の古写本たる保坂本を取り立てた点も特長。

先ず宿木巻冒頭登場人物の解釈の際に、竹河巻の内容にひきつけて読む可能性を示唆。次にその人物の事跡を梅枝巻に遡り、『源氏物語』構想論上最大級と先人が認めた問題を検証、その筋の紅梅巻と若菜上巻への関与を認定。紅梅巻の筋と宿木巻との接続から武田宗俊説の紅梅巻を宿木巻の前にとの論を想起。更に古来竹河巻最大の問題たる巻末昇進記事に見る異読に光を当て、官位記述による矛盾回避の糸口を見出す。継いで竹河巻冒頭に竹河巻を別伝外伝とする読み方の介在を認めつつ竹河巻否定・不要説を検証。更に竹河巻末尾で同時に官僚たちが昇進するのを描く本文に対する異読の中に、人物の官位の描写によって引き起こされる内容上の矛盾を回避する効果があるのを発見。次に橋姫物語を進む間、平安末期の読み手が竹河巻の巻序を浮動状態でサスペンドされたままとなった可能性を示す。

ここで今一度宿木巻に戻って、巻冒頭に登場する人物について、平安末期成立の古系図の記載傾向から判断すると、宿木巻の直前に竹河巻を挟む読み方が当時存在したとの仮説が導かれる。継いで橋姫物語全域に対する匂宮三帖の位置づけを具体的に検証して、紅梅巻と竹河巻に橋姫物語に前置すべからざる機構が働いていることを立論して、仮説の蓋然性の高さを保証した。

### 第二節 源氏物語本文考2

本節では、この仮説旧巻序に従って読み進めていた時代に、どのような課題が生じていたか、特に古い読み方、源氏物語の古写本の異読に注意を払いながら検証する。特に宿木巻に見える話の再生、或いは鑑賞に必要な話題の過去への遡上を求める本文に関する課題の存在を確認し、現存の古い形を残す別本の異読の持つ意義を発掘し、平安末期成立の九條家本古系図の果たした機能と意義について論じ、平安時代の巻序浮動状態の实在、仮説旧巻序の実効性を説いた。

### 第三章 最福寺本『伊勢物語』について

#### 第一節 本文略説

該本については、伊勢物語全体の中で、本文が池田亀鑑博士による『伊勢物語に就きての研究 校本研究篇』で、行間の朱注が大津有一博士による『伊勢物語古註釈の研究』で報告されている。そこで本研究では該本を軸に据えて再分析を行った。

零本である該本で本文が存在する範囲で（第一章第二節で示した〈レベル2〉）で 独自異文・独自共通異文数600項目を超え、密度では前者で本間美術館本だけ、後者で本間美術館本と阿波国文庫本だけが該本を上回ること、そして書写に杜撰を認めつつ、重複衍文と擦り消しかから親本を字形の一致を求めて写す精度を維持しようとしていたことを析出する。

片桐洋一博士により普通本中の別本に位置づけられた該本本文は、独自共通異文のパートナーとして本間美術館本を筆頭に伝後醍醐天皇宸翰本・真名本・伝為明筆本・伝肖柏筆本・阿波国文庫本・泉州本・参考伊勢物語伝為家本・武者小路本等……錚々たる異本の陳列となり、これらを寄せ集めて該本の形を再建するのは不可能と思われることから、彼らの混態によって該本の生成を説明することの困難を証明して、該本が定家本以前の古い伊勢物語本文の形を伝存するポテンシャルを持つことを示した。

また別本のシンボル「琴の異読」を以て該本を末流とする福井貞助説に対し、異読生成のメカニズムを整理した上で否定。更に『異本伊勢物語絵巻』絵詞との一定量の排他的独自共通異文を析出、そこにも定家本を遡るポテンシャル、別本の最異端に最福寺本が位置することを示した。

#### 第二節 書入略説

朱注の中に大津説に示す冷泉家流であることを示す東下り否定説が存在するのを確認。冷泉家流の写本書き入れ形態、注釈冊子形態相互との比較から、写本書き入れ形態を軸に説話的記事で『十卷本伊勢物語注 冷泉家流』、冒頭～5段にかけて『(慶応義塾大学附属図書館蔵) 定家流伊勢物語注』・『(妹尾好信蔵) 伊勢物語注』と排他的特殊関係を析出。注釈冊子形態諸注の集大成『(宮内庁書陵部蔵) 冷泉家流伊勢物語抄』と相対する、写本書き入れ形態諸注の集大成が最福寺本において実現されていることを示す。また墨の書き入れに冷泉家流とは別種類の、他本からもたらされた内容を認める。

### 付章 文学研究と家族・婚姻研究 — 『蜻蛉日記』を通じて —

William=McCullough 氏による平安時代の貴族の婚姻制度に関する画期的な論文『平安時代の婚姻制度』の、遡っても近世以降の書写で非文の多さゆえ難読で知られる『蜻蛉日記』読解への援用を試みる。

従来文芸評価から外されがちであった居住制度・財産・婚姻規定・育児等といった婚姻制度に直接関わるファクターが、一層克明に描かれていること、作品が結婚生活上重要な転居・出産など平安貴族の典型的なライフステージを描いていることを析出。離婚に合わせて作品が終わることを示し、本作品の主題そのものが結婚生活であったと説く。